五月六日の土曜日、五・六年生児童全員と他学年希望者（児童・保護者）と六大学野球応援に出かけました。対戦校は東京大学。六対一と、順調な試合運びで、子どもたちも余裕の笑顔で応援していました。

ところが、東京大学の選手に満塁ホームランを打たれ、何と同点で試合終了。当日、風の強い日でした。紫に十字の校旗が翻るのを眺めつつ、立教大学の校歌をほろ苦い思いで歌うことになってしまいました。う～む。

立教大学の校歌の一番の歌詞は、

「芙蓉の高嶺を雲井に望み
紫匂える武蔵野原に
いかしくそばだつ我等が母校
見よ見よ立教　自由の学府」です。

実は一学期の始業礼拝時に、子どもたちに立教の校旗のいわれについて、次のようなお話をしました。

大学の校歌に登場する「ムラサキ」を漢字で省略しないで書くと「紫草」。植物です。六月頃に白い花を咲かせます。白い花なのに紫草。「なんで?」と思うでしょう。実は紫草の根っこは、「紫根＝しこん」と言って紫色なのです。

紫草の根っこである紫根を乾燥させて、石臼でついてから麻の袋に入れる。それを湯の中で何度ももみ、紫根から赤みがかった紫の色素が出なくなるまで絞る。そのたっぷりした液で布や糸を染め、それを椿の木の灰を混ぜた熱湯の中に置いておくと、美しい「江戸紫」の出来上がり。

「武蔵野」に、紫草が自生していたのは平安時代からのようですが、江戸時代になり、紫草を使って、江戸で作った染物のことを「江戸紫」と呼ぶようになりました。

現代の三鷹あたりから奥の五日市方面にかけて、江戸時代には紫草がかなりの量栽培されていたようですが、今は絶滅危惧種です。井の頭池を水源とする神田上水の水をふんだんに使えた事、紫草の色を定着させるために使う「椿の木の灰」が、伊豆大島から十分に供給されたことにより、江戸紫が盛んに染められたようです。

「紫匂える武蔵野原」という歌詞の「紫」は、江戸紫の原料の紫草を指していて、立教と「江戸紫」にはつながりがあるということを分かっていただけましたか。

立教大学陸上部で代々受け継がれている箱根駅伝の襷（たすき）の色は「江戸紫」と呼ばれていますが、校旗の色は江戸紫と呼ぶわけではありませんので、お間違いなく。

紫草ではない、「ある物」使って染めた紫をヨーロッパでは古代紫とかローマ紫、帝王紫と呼んで、これで染めた物は、王様以外は使ってはいけないことになっていました。一グラムの染料を得るために、その「ある物」が二千個も必要なのだそうです。その「ある物」は、実は日本でも手に入り、食べられます。「ある物」のパープル腺という所から液を取り出し、この液を海水で薄めて糸や布に染めると、最初は黄色なのに、太陽の光に当てると緑→紫に変わっていくという不思議な染め物。まさに王者の紫と呼ばれる貴重な紫に、立教の旗の色は近いのかもしれません。

と、このような話をし、「ある物」が何であるのか、興味のある人は調べてみてくださいと、得意の「寸止め」をしました。その後、一年生と四年生の子が、「ある物」の正体を教えに来てくれました。それは、「貝」。

日本産のアクキ（アッキ）＝悪鬼貝科のイボニシやアカニシから「貝紫」が得られます。

寸止めの情報に反応して、調べてくれるのはとても立派。ただ、ネットの情報に頼るだけではなく、そこに記されていた参考文献を実際に読んでみるとか、なんで、「悪鬼」なんて怖い字を書くのかとか、さらに進んで深～く調べられるようになると本物ですね。

ちなみに「アカニシ」はなかなかおいしい貝です。アカニシは何に「化ける」のか。江戸時代には何のたとえに使われたのか。また、寸止めをしたくなりました。

（立教小学校校長　田代　正行）